

新教科「情報科」導入にあたって

さなえ まさし あおき かおる
早苗 雅史, 青木 薫生

0. はじめに

21世紀を迎え、つらつら前世紀を振り返るに、他に類を見ない程目覚ましく発展した。特に電気・電子部門、具体的には敗戦後、テレビ等家庭の三種の神器と呼ばれたようなものから始まり、現在のコンピュータに至るまで、その発展を見ていると、21世紀の更なる発展も期待せずにはいられない。しかし、人はどうも輝かしき側面のみを強調して見るが多いらしく、我々はその反対を考えることも大事にしたいと思う。

特に、ここ10年の情報分野における生活様式を激変させたコンピュータの普及、これについては最近の社会面を見るに当たり、悲惨な結果を生み出す手助けをしてしまっている面があることも否定できない。とは言うものの、現代の車社会において車の普及を否定することができないように、何事もその使用者のモラルが大事であると感じられる。また、その他に、例えば、車の運転にあたって、人が車を操らなくてはいけないのであり、人は車に操られてはならない。コンピュータについても同様のことが言えるように思う。

ご存知の通り、1998年に指導要領が改定され、その新課程は2003年より始まる。今回の改定の目玉となるのは、「総合的な学習の時間」と「情報科の設置」である事は間違いないであろう。これらの導入は現社会の状況を反映してのもの、といえれば格好がつくようにも感じられるが、どうも体裁だけを縫ったもののように感じられてならない。本稿では新教科「情報科」について「数学科」とも関連させながら一考案を述べたい。

1. 新教科「情報科」(ゆとりのない準備)

バブル崩壊後、手に職をとということで様々な資格や免許を取得する動きが高まっているが、今回の「情報科」の免許ほど限られた者に短期間で与えら

れる免許を、私達は他に知らない。(聞く所によると、戦争により看護婦の人手が足りず準看護婦という制度が設けられたというようなことを聞いたことはあるが、このことと比較する事は出来ないであろう。)人に多大な影響を及ぼす免許であるために、「ゆとりある学習」を目指す教師側がせわしなく免許を与えられても滑稽に感じられるばかりである。次に、更に詳しくその免許の取得について述べる。

「情報科」を指導する教師を作り上げる為、特例処置として現役教師が利用される。つまり、2000年から3年間で育成される約9000人の「情報科免許保有者」である。この免許保有者になるためには講習を受けるのであるが、現在、数学、理科、家庭、商業、工業等の指定された11科目の現役教師であることがその条件である。この制度は既に始まっているわけであるが、内容には？が付くようである。まず、受講以前の話として現場に新教科の目標、内容、受講を可能とする条件、受講内容が十分に行き届いていないところも各校に見られるようである。また、受講した先生方の話では講習内容も充実したものではなかったようである。

また、受講を可能にする11科目の制限であるが、根拠はどこにあるのであろうか。ソフトに関しては文章作成や表計算に関するものが出回っているが、それらは国語科、社会科にこそふさわしく、中には「国語にこそコンピュータが必要」とさえ言う方がいると聞く。また、そもそも教科を限定することこそ間違いであることは言うまでもないのではなかろうか。参考までに、ある大学のある学部では、国語科と社会科、英語科の免許が取得できるそうであるが、この度、そこで「情報科」の免許が取得可能になったそうである。ますます現場とのずれが出てきている。この度の免許取得は、“突貫工事”としての苦肉の策であるから、やむ無しとしなければならぬのであろうか。

その後の教員育成については、大学で情報科の免許を取得した教員が採用されるのである。しかし、これについても順調にはいっていないようである。というのも、数えてみるに情報科の免許取得者育成は2000年大学入学者には適用されなければならないが、どの大学においてもそのようにはなっていないようである。また、大学の方では免許取得が可能になるように申請が出されているようであるが、かなりその申請許可はしぼられているようで、今のところ国立大学では3大学が許可を得られているようである。

このように考えてみると、時代に要求されて新設されたはずの情報科が形骸化してしまう危険があることが容易に想像できる。それでも現役教師の努力により授業は押し進められるであろうが、生徒への影響が最大限悪くならないように努力されることを期待してやまない。

2. 数学科への影響

この情報科の導入に当たり、多大な影響が数学科に与えられるように感じるのは我々だけであろうか？まず、今回の指導要領改訂により(「情報科」導入だけの影響ではないが)数学の学習内容は、誠にお粗末なものになってしまった。内容についてはご存知の通りで、今更書く必要もないであろう。更に誠に残念な事ながら現場からは反対する声が上がらないだけでなく、現段階において学校によっては大学受験を意識するあまり、数学II, III, Cを履修させる生徒を制限する所もあると聞く。誠に残念極まりなく、悪循環であることを認識していただくことを願うばかりである。

また、非常に不思議でならないのが、この「情報科」の免許取得を希望する方が比較的多いことである。例えば、北海道では定員の約3倍の申し込みがあったと聞く。そこでやはり、免許取得を希望する方がどのような方々なのかは多少なりとも気になるところである。他数科と同様、情報科も一つの独立した教科であり、その免許取得にあたっては自らの意思によるものであるはずである。しかしながら、我々はいくら考えても正当な理由が見当たらない。考えられる取得理由としては、「とりあえず」、「なんとなく」、「現在指導している教科よりも情報科の方が魅力を感じ心機一転したい」というような内容

が思いつくだけである。このような否定的なことが理由で「情報科」を指導する教師がいないことを願うばかりであるが現実にはどうであろうか。

また、どうも一般的にコンピュータ指導は数学教師がふさわしいと思われているようである。しかし、数学は理論に重点が置かれる学問であり、例えばその計算に道具としてコンピュータが用いられているだけであり、これは国語の文章表現、社会の統計処理、理科のデータ処理にそれが用いられていることと同じで、数学がコンピュータに操られているかのような表現は、現実とは相反するのである。

今回の情報科導入で学校はコンピュータ設置が成されているであろう。これにより、科目の学習にコンピュータを用いる機会が増えると思われる。このコンピュータを用いる学習について全般的にいえる事は、その授業が各教師によって左右されることを念頭に置かなければならないことである。コンピュータを指導するだけでなく、技術も含めた総合的な観点から指導する必要があるという点で、教師側に多くの知識やモラルが要求されるであろう。また、数学教育においては逆に、コンピュータの技術面だけを学習し、数学的な考え方や見方の学習が疎かになる恐れがある。コンピュータは道具でしかないことを肝に銘じなければならないであろう。

3. まとめ

「情報科」関連の事情を良く知る人の話によると、なぜお金のかかる新科目の設置を急いで行われるかという点、どうも人事の関係や政治的要素がかなり多く含まれているようである。迷惑を被るのは現場と、国や地方の事務関連の方々、そして、生徒なのかもしれない。どのような事情があろうと、主役である生徒のことを考えた指導であって欲しい。子供たちの「生徒時代」は一度しかないのである。そして、我々は(純粹には情報科設置に反対するつもりはないので)数学科と情報科等など、全科目のさらなる発展を祈るばかりである。

(北海道立札幌稲北高等学校, 大阪教育大学)